構造助詞“de”の省略可能性

——Inalienble possession

相　原　　茂

1.　人称代名詞が，名詞を修飾するときには，一般にその間に助詞 de の介在を必要とする[1]。ところが，‘我妈妈’や‘我们公社’などの場合は de が省かれるのが普通である。今，de の省略可能性，および被修飾名詞の類によって，これを三分類して示せば[2]，

A：	*我书	我 de 书
	*你铅笔	你 de 铅笔
B：	我家	我 de 家
	你们学校	你们 de 学校
C：	我妈妈	我 de 妈妈
	你爱人	你 de 爱人

BおよびCは，de の介在があっても可能であるが，その場合，Aの‘我 de 书’とパラレルな表現とはみなされず，ことさら「他と区別して，明示する」表現であるとされる。

従来上述のような現象に対しては，ほぼ次のような説明がなされて来た。すなわち，B類の名詞は「組織」或は「集団」の名称を示すものであり，C類は「身内」「親族」名称である，と。この限りにおいて，これらの説明は正当であるが，なぜ組織や親族を表わす名詞が，人称代詞のあとの de を省けるかについては，まとまった説明はされて来なかったように思う。この二つの類は，inalienable possession 譲渡不可能所有という概念によって統一的に説明可能であると思われる[3][4]。

B・Cの名詞は，それぞれ集団や親族の名称であるが，これらと人称代詞との関係は，de を介在させて，de の意味機能の一つとして，「所有・領属」の概念を顕在化せずとも，それは二項間の（名詞）連鎖によって十分表わされているのだと言える。ところが，Aの‘我 de 书’の類は，名詞‘书、铅笔、雨伞’な

どが「私の」所有であることを顕在的に示す必要があるわけで，人称代詞との関係——所有は任意的 optional である。逆に言えば，所有物は容易に他に譲渡可能であり，所有者と分離可能なものである。この点で，B、Cに含まれる‘家、学校、公社…；妈妈、爱人、哥哥…’などが，所有者と譲渡不可能所有関係であることと異なる。

C類には親族名称のみが含まれるのではない。Chao 1968（p. 289）は次のように言う：

> After personal pronouns *de* is usually omitted before nouns for personal relations (unless the modification is to be made specially explicit), ……

人称代詞のあとの名詞が人間関係を示しうるものであれば，de は省けるとしている。例えば‘我老师、我们校长、你们班长、我们医生’[5]など。人間でない生物，例えば動物などは任意所有であり de は省けない。

BとCは互いに無関係なのではない。Bの組織・集団・機構名称と，Cの人間関係を示しうる名詞との間には次のような対応がある。

表1.

［B類］	［C類］
公社	社长
大队	队长
学校	校长　老师
军队	班长　排长　连长……
家	妈妈　妹妹　弟弟　爱人……

C類の名詞は，B類の組織や集団内の地位・役割を示すものに限られている。とくに，最終列の‘家’にかかわるものが，C類を構成する一群の親族名称になっている点が注目されよう。おそらく，B類の‘公社、大队、学校、……’などは，中国人にとって強く共同体意識を感じさせるものであり，自分もその集団内の一員として構成に（直接，間接）参加しているという感覚を持っているのであろう。つまり，ある共同体的組織に不可分 inalienable に組み込まれているという意識があり，それは同時に，当該集団内における人間関係にも反映していると考えられる。もとより，役割名は，ある体系や構造を前提とする

関係概念を示すものである。

だから，例えば「我々の弁護士」というときには‘我们 de 律师’と de を必要とするのが普通で，これは‘律师’が役割として含まれる上部の集団がないか，又あってもそれは中国人にとって日常的な関係をもつものでなく，従ってそのような集団は自分たちの共同体として意識されていないためだと考えられるかも知れない。この点，‘医生’や‘老师’などとは好対照をみせている。[6)]

以上のことは中国社会の現実のあり方と，それに関わる人々の意識が関与的だということを物語る。しかし，inalienable possessien という概念が，言語の世界の文法カテゴリーとして考えるべきか，事実関係から来る純粋な概念であるかについては，中国語において，この概念の適用を受ける他の語いが，統辞面でどのような環境に現われるかを調べる際に，あらためて検討されることになろう。ここでは，とりあえずB・Cの類を構成する名詞のメンバーは，事実関係より起因する概念である inalienable という素性（これを［−alienable］と表わせよう）を持ち，それが統辞面に「de の省略可能」という反映を見せていると考えることが出来る。

以下に，語の固有素性として［−alienable］をもつ（従って de が省ける）名詞の目録の一部を示す。

表2.　B：国家　大队　公社　军队　村　学校　工厂　班　医院　家……

　　C：社长　村长　队长　班长　连长　厂长　同志　老师　医生……

　　C′：妈妈　爸爸　妹妹　弟弟　姐姐　哥哥　爱人　叔叔……

〔注〕

1）「介在」という語は，まったく話線における言語単位の客観的連鎖からのみ語られており，de が前後の要素から独立して，それを仲介する作用を果しているという機能面での解釈はここに含まずに使用する。

2）以下，とくにことわりがなければ，示される語連鎖に対する可否の判断は，単独で発話された場合のものである。‘*你铅笔’も例えば文の主語として‘你铅笔在哪儿？’という形で起り得る。

3）inalienable possession は，日本語では「譲渡不可能所有」「転移不可能所有」或は「不可分所有」などと訳される。

4）この概念と，その中国語への適用は，私は Lyons 1968（p. 301）から直接の示唆を受けている。又，同書 p. 394 および Lyons 1967. は，*wǒde shū* v. *wǒ jiā* を例示して

いる。しかし先行名詞が人称代詞に限定されることには言及されてない。「所有」という概念において，なぜ人称代詞の場合にこのようなことが言えるのかは，より広い考察が俟たれる。ただ，N de N というワクにおいて，名詞とそれが関係をもつ他の名詞の数は無限であり，その間の意味関係も又無限ということができる。この点，人称代詞は，他の名詞と機能及び意味上異なるために，二項名詞間に「所有」という意味関係を仮定しても比較的問題が起こらない。

5）‘我们医生’は「私たちのお医者さん」の意であり，「我々医師」と，同格を示す意味には普通とられない。むろん，全国医師会議のような席上，‘我们医生应该担任这项任务’などと発言すれば，これは同格を示すものとも解される。

6）親族名称でも，どこまでが不可分所有とされるかは，まとまったデータがない。インフォーマントは‘*我祖母’や‘*我祖父’などは de を省きにくいと報告されている。呼称，世代の上下，血縁の有無などで一定の構造が明らかになるかも知れない。

2. de が省かれる例として，さらに次のように，被修飾名詞のあとに localizer がつくものが知られている。

1） 我书上／你桌子上／他杯子里

被修飾名詞はいずれも［+alienable］と考えられるものでありながら，de は省略可能である。この場合，localizer のはたらきによって，‘书上’‘杯子里’等は，いずれも場所表現となっている。そこで，A、B、C類の名詞を，alienable、place、human という三つの固有素性によって表を描いてみれば，次のようになる。

表3.

	alienable	place	human
A 书	+	−	−
B 学校	−	+	−
C 老师	−	−	+

B類の名詞の素性として［+place］が含まれると考えられることから，今論じようとする，‘书上’等の Noun・localizer は，それと何らかの類似点を持ち，それが de の省略可能性に作用しているのではないかという予測が可能である。問題は，広い意味での「場所」は inalienable ではなかろうか，という問いに帰せられる。

何らかの意味で場所を表わす place word を，語の性質によって，又小論の便に合わせて，次のように分けて考えてみる。

(i) localizer (-上, -里, -内, …)

(ii) position word (上头, 里面, 外边…)

(iii) 場所名につかわれる名詞 (学校, 屋子, 邮局…)

まず, (i)の localizer は先行名詞との間に de が介在されることはない。'杯子里' とは言うが, '杯子 de 里' とは言わない。これは性質の異なる二つの理由が考えられる。一つは, 単音節 localizer は, 文法機能は bound だから, 独立できないということ。もう一つは, 意味論的に, 位置は単に「上」や「下」と言われるものではなく,「～の上」「～の下」とその前に実質的意義をもつ単語や phrase が必要とされる, ということ。単独に '上' '下' と言われても, 解釈に際しては, 必ず何らかの基準を想定している筈である。この意味で, localizer は先行する実質的語句と不可分 inalienableに結合していると言える。

(ii)の position word も, (i)と平行的に考えられる。ただ, 文法機能は free だから, de を介在して言うことも可能である。'学校前边 v. 学校 de 前边'。しかし, 意味的には位置を示す localizer と同様な理由により, 先行語句と不可分な関係にあり, de を省ける。又, '我方面' における '方面' や, '以下、以上、以内、以外、以后、以前' なども意味的に非独立で, 同断である。

position word, localizer 共, 語の固有素性として [−alienable] を有すると考えられ, これをそれぞれ D、D′ として, 表2に補っておく。

しかし, 今問題としているのは '我书上' 等の P-Noun-localizer (P＝人称代詞) において, 第一名詞Pと第二名詞Nの間に, なぜ de が省かれるかであった (第二名詞と localizer の間ではなく)。単音節 localizer は, それがbound でありながら, 必らずしも単語の suffix として機能するとは言えず, phrase 全体にもつくという活動的な側面をもっている。もし, '上' が単語の morpheme としてしか考えられないならば, '我书上' においても, IC 分析は '我＋书上' となり, かつ '书上' の文法機能を決定しているのは localizer で, 全体が場所を表わしていることから, Noun-localier という構詞形態の place word は素性 [−alienable] をもつ (従って de は省ける) と考えることも出来よう。しかし, '我书上' の IC 分析は '我书＋上' としか考えられない。とすれば, 問題は [＋alienable] とされる名詞 '书' が, この場合なぜ, de の介在

のない形で生起して可能であるかという点に戻らざるを得ない。[1)]

次の例：

2) 我 de 书 de 颜色 ⟶ 2)′ 我书 de 颜色

3) 你 de 宿舍 de 门限儿 ⟶ 3)′ 你宿舍 de 门限儿

2) は 2)′ と，3) は 3)′ と同義であり，一般には de を二度用いる言い方よりも，2)′ 3)′ のように代名詞のあとの de は省かれるのが普通である。この場合も IC 分析は‘我书＋上’とパラレルに‘我书 de＋颜色’，‘你宿舍 de＋门限儿’であり，かつ代名詞の直後の名詞も［＋alienable］とされるものである。これは，今情報の焦点 focus となっているのが，後方の「本の色」や「宿舍の門限」にあり，‘我’や‘你’にはすでになく，代名詞にはプロミネンスもおかれずに発話されることが一般であるためだと考えられる。情報の焦点が後方に移っているため de が省かれるのだとする見方は，例えば次のような対比からも看取されよう。

4) 我 de 书 *我书

5) 我 de 那本书 我那本书

4) では de を省けないが，5) のように‘那本’が入り，情報の重点が後方に移れば de は自然に省かれる。むろん「私の」を対比・強調する場合には，de を挿入すればよい。日本語でも，名詞連接は，後方の名詞に重点がおかれる傾向がある。

この分析を傍証するものとして，文中で‘把’の目的語となった時の‘P de N’における de の省略可能性を示そう。

6) 他把我书拿走了。

7) *他拿走了我书。

これは，「把＋目的語」はその直後に他動詞を要求し，目的語はパッケージに入ったように結合が緊密化され，かつ情報の焦点は直接処置を受ける obj. N におかれるために de の介在が不要となるのであろう。[2)] プロミネンスも‘书’の上におかれ，一般に‘把’の目的語は pause なく発話され，最後の obj. N のあと，他動詞の前，に pause がおかれて情報の焦点を明示するという形をとる。私のデータ，及びインフォーマントの内省では，‘把’のあとの‘P de N’

のワクに合適するもので，de が省略不可能な例は皆無であった。[3)]

以上のような観察から，‘我书上’ のＰとＮの間で de が省けるのは「情報 focus の後方移動」と考え，inalienable という概念は直接これに関与的ではないと，初期の予想に反して，解釈する。

(iii)の場所名として用いられる名詞には，すでに§１で挙げたＢ類の他に，次のような［＋place］をその意味の一部に含む語が考えられる。

Ｂ′：教室　房子　书房　图书馆　邮局　屋子　宿舍　客厅……

これらは place word として用いられても，本来 position word とは異り，語自身実質的な指示物を持ち，意味的独立性も高い。Ｂ′の名詞は，いずれも人称代詞のあと de を要する。

8）我 de 教室　　*我教室

9）你 de 宿舍　　*你宿舍

比較対照のため，position word の場合を示せば：

10）我 de 前头　　我前头

11）你 de 后面　　你后面

Ｂ′がＢと異なる点は，§１の記述からも明らかであろうが，この間の差異を典型的に示すものとして次のような対比を見られたい。

12）我 de 房子　　‘my house’（*我房子）

13）我家　　‘my home, family’

14）我 de 教室　　‘my class-room’（*我教室）

15）我班　　‘my class’

Ｂの例である 13）15）はＰ∈Ｎ（ＰはＮのメンバーである）という関係がみられ，Ｐとの結びつきには偶然的というよりは必然的なものが，一時的というよりは恒久的なものが，感ぜられる。いわば inalienable possession であり，そこから自然に感情的な「親密さ」も派生してくるのであろう。Ｂ′の例では，ＰとＮの間にはむしろ一時的，任意的所有関係を見ることができよう。

〔注〕

1）これは，以下の論証からも察せられるように，多分に syntax にかかわり，単独発話の phrase とはややレベルを異にすることかも知れない。

2）目的語のパッケージ化という概念は，例えば，二重賓語の直接目的語が比較的長い場合に，‘把’によって「提前」し，文の容認可能性を高めるという言語運用面での方策を説明するのに有効であろう。拙稿「中国語の“把”字句に関する諸問題」参看（東京教育大学『漢文学会々報』第三十二号）。

3）むろん，動詞と名詞とに overlap するような性質の語は de が省かれることはない。‘病、研究、学习、成功、愿望’などがその例であり，把我 de 病；*把我病である。

3. inalienable possession に関して，典型的な例としてよく引き合いに出されるのは身体部位名称である。しかし，中国語においては，B、C、D類の語とは異なり，単独の phrase 表現では de を省略しない。

16） 我 de 眼睛／他 de 鼻子／他 de 耳朵

身体部位名詞は，先行する人称代詞と事実においては不可分所有関係にあることは明らかである。にもかかわらず 16）のような現われ方をすることは，inalienable possession を文法カテゴリーとして考えるべきことを示唆する。さらに素性［±alienable］が，各言語の相当詞の間で「同じように分類されることになるか，あるいは‘同じ’ものをそれぞれの言語で異った分類をするそのやり方は，おそらくそれぞれの言語の話し手の精神構造における違いを反映することになるか，そのどちらかである[1]」のであってみれば，このこと自体は奇異ではない。しかし，単純に身体部位名詞は inalienable ではないと断定できないのは，中国語ではこれが関与する，所謂 S-P predicate（Chao. 1968. p. 94）の二重主語文が存在するからである。この構文の特徴はS（総主語）とS′（述語に含まれる主語）の間に‘owner and owened, whole and part, class and member’（Chao. 1968. p. 95）なる関係が見られることで，これは不可分所有の概念に極めて近い。

‘他耳朵软’‘我头疼’などが典型的な例である。このような文は，日本語の二重主語文として論争の多い「象ハ鼻ガ長イ」を連想させる。日本語では，文法カテゴリーとして inalienable possession をこの文型のために導入してよいと思われる。次の 17）は 18）に変えられるが，19）は20）に出来ないことに注意：

17） 彼の頭はきれる。

18） 彼は頭がきれる。

19） 彼のハサミはきれる。

20）*彼はハサミがきれる。

中国語では，日本語のように「ハ・ガ・ノ」等の助詞をもたないために，このような検証によることは難しい。[2)]

二重主語文はそれのみで大きな論題であり，ここで十分論を尽くすことは望めない。しかし，強調しておいてよいと思われることは，S-P predicate の典型的なサブタイプは S と S′ の間に， S ⊃ S′ なる関係のあることで，これは Chao 1968（p. 97）が挙げる無生物主語についても同様である。

21） 这棵树叶子大，花儿少。

22） 中国地大物博。

また，以下の 23）や 24）のような文と同一視できぬことは，S と S′ が不可分所有の関係にあるものでは，verb は殆んど Static verb であるが，そうでない文では Action verb が一般に用いられることからも看取されよう。

23） 他乒乓球打得好。

24） 你房子盖在什么时候儿？

これは，‘他脑筋好’などのように身体部位名詞が S′ になった場合には，S′ は S と不可分であることから，より状態に接近するためであろう。[3)]

以上のようなことから，身体部位名詞は，単独発話の phrase レベルでは de の省略可能性という形で，その不可分所有性を認められないが， Sentence レベルでは特徴的な文タイプとなってあらわれていると考えてよいのではなかろうか。この点，日本語に類似し，英語などとは異なる。

〔注〕

1）Fillmore 1968. 訳は田中春美・船城道雄『格文法の原理』三省堂，1975. による。

2）Fillmore 1968. は，inalienable possession の場合は NP⟶N（D）から導かれるとし，alienable possession の NP⟶N（S）と区別する。すなわち，前者は文から導き出されるとは考えず，後者は「X has Y」という形の文を深層において設定している。なお，望月氏 1974（p. 71）は ‘他们身体都好’ を主述述語文とは考えず，de を S と S′ の間に入れた ‘他们的身体都好’ を深層構造とする見解を示されている。

3）中川氏1973は ‘他父亲公司很大’ の奇妙さを指摘しておられるが，これも S ⊃ S′ でないため完全な状態形容詞 ‘大’ がそぐわないのであろう。身体部位名称であれば，‘他父

亲脑袋很大' と問題がない。'忙' は '大' に比して動作性が感じられるから '他父亲公司很忙' は比較的容認可能性が高くなる。又 '*他文章很好' は，形容詞述語を変えなければ，de を挿入して '他 de 文章很好' と主語を状態に近づければ不自然さはなくなる。

4. 複合語構成のレベルでも，不可分所有という文法カテゴリーが一定の説明能力を有することを見てみたい。

例えば，'桌腿儿' 〈テーブルの脚〉，'锅盖儿' 〈なべのフタ〉等における第一 morpheme と第二 morpheme ——これをN_1, N_2と略記する——の関係は，N_2はN_1の一部として不可分に所有されており，$N_1 \supset N_2$と考えられる。N_2，例えば（テーブルの）脚の存在は，N_1のテーブルという整体を前提としてはじめて可能である。日本語では，訳が示すように，このような場合「N_1のN_2」と「の」を使った表現になるが，中国語では de の介在なしで言われ[1]，その多くは単語と認定できる性質のものである。次の表はN_1とN_2が不可分所有関係にある語の一部分を示したものである。

表4.

(i)	桌腿儿〈机の脚〉	椅背儿〈椅子の背〉
	桌面儿〈机の表面〉	鼻子眼儿〈鼻の孔〉
	瓶嘴儿〈ビンの口〉	针眼儿〈針の目〉
	印鼻儿〈印章のつまみ〉	梳子齿儿〈櫛の歯〉
(ii)	伞把儿〈傘の柄〉	笔帽儿〈鉛筆のキャップ〉
	刀把儿〈包丁の柄〉	鞋跟儿〈靴のかかと〉
	火柴棒儿〈マッチの軸〉	眼镜框儿〈メガネのフレーム〉
	帽檐儿〈帽子のつば〉	刀刃儿〈ナイフの刃〉

この語い表からすぐ目にとまるのは r 化現象であろう。r はN_1・N_2全体についているのではなく，N_2についている。そして，N_2は整体の一部分をなす非独立的，附属的なもの，したがって多くは小さなものであるから，このことはドラグノフによって明らかにされた r の意味機能と符合する。

(i)と(ii)に分けて例示したのは，(i)に現われている語いの第二 morpheme N_2は，すべて身体部位名詞であることに注意していただくためである。ここでは，人間の身体部位を指示する意味ではなく，比喩的に用いられている。このような比喩的用法は，日本語の「瓶の口」や「台風の目」という表現，英語

の *foot of hill*, *mouth of a river* 等に見られるように，人間精神の自然なアナロジイの力の現われであり，比較的普遍性をもつ現象と思われる。[2)]

de の生起に関しては，動物の場合は人間とは違う現われ方をする。

25）他 de 脚　　*他脚

26）鸡 de 脚　　鸡脚

しかも‘鸡脚’は単語と考えてよい。同様に，

牛 de 角（牛角）　　马 de 尾巴（马尾儿）　鸟 de 嘴（鸟儿嘴）

老虎 de 尾巴（虎尾巴）　兔子 de 耳朵（兔耳朵）

耗子 de 牙（耗子牙）　羊 de 胡须（羊胡须）

括弧内の表現は phrase よりも単語に近い。さきに，不可分所有関係にあるものは状態に接近していると述べたが，「ａハｂガｃデアル」という身体部位名詞(b)を含む文において，ａとｂ，ｂとｃはその結びつきが緊密であることから，それらが熟した表現となり，熟語化され転用義を生ずる可能性がある。ｂ＋ｃでは，日本語「腹黒い」や「手がはやい」，中国語では，‘胆子大，脸皮厚，手巧’などがその例である。ａ＋ｂの例は多い。狗肺／腹黒い　狗脸／怒りっぽい（人）　狗头狗脑／愚かもの　狗腿子／手下　鸡胆子／臆病者　鸡骨头／やせた人　牛脖子／強情　猫儿嘴／口のいやしい人。このような時，ａとｂの間にdeを介在させることは出来ない。しかし，このような転用熟語の成立には，不可分所有という概念が関与的であると考えられよう。特に，ａ＋ｂにおいて，ａは決して人間でないことに注意されたい。このことは，ｂ＋ｃで，ｂが人間の身体部位と考えられ，その熟語も人間の性状を表わすことと表裏一体の関係にある。単独で身体部位名称が使われた場合，それは人間の身体部位と考えられる。すなわち，身体部位名詞は事実としては所有者人間と不可分でありながら，身体部位名詞自身が「人間のもの」という先行語に相当する意味を含んでいると考えられるため，自立的，独立的なものである。このことは§3 で，身体部位名詞が他のＢ、Ｃ、Ｄと異なり，phrase 表現で deを必要とすることの説明となろう。すなわち，先行語に人称代詞が来た場合，それは人間の中から特定の人を指定するわけで，「区別、明示」の機能をもつ deが省かれないのだと思われる。先行語が固有名詞の場合も同様である。

蛇足めくが，‘木头椅子’や‘呢子制服’などのN_1（木头）がN_2（椅子）の材質を表わすものも，N_2がN_1を不可分に「所有」すると解釈出来るかも知れない。が，やや牽強付会の感があり，ここまで論を広める自信はない。

〔注〕

1）de を介在させても言うことは出来る。しかし，その場合は「区別し，明示する」はたらきが出てくる：这是锅 de 盖儿，那是壶 de 盖儿。また‘桌 de 腿儿’が言えないのは，N_1 が bound であることによる。cf. 桌子 de 腿儿　椅子 de 背儿　鼻子 de 眼儿

2）N_2がｒ化されることにより N_2ｒ全体が別語となるのか，N_2に基本義、比喩派生義を考え，派生義の時にｒ化されることがありうるのか，は語生成 process の問題とｒの意味機能をどう考えるかにかかわる。しかし，‘山腰、山脚、墙脚、山口、刀背、手背’などはｒ化されずとも第二 morpheme はいずれも派生義と考えられることから，後者の解釈の方が妥当ではないかと，今のところ考えている。だが‘山脚、墙脚’の N_2 の派生義は‘最下部’と考えられ，‘针眼儿’や‘印鼻儿’の N_2 の派生義とはややニュアンスを異にすると思われ，上述の考え方にも依然疑問は残る。なお，これらの問題を含む，より包括的な中国語の morpheme と意味を扱った論文としては，松本昭先生 1968 を参照されたい。

5.　以上のことを簡略に図示しておく。

		先行語	de の生起	［－alienable］とされる類	
Ⅰ］	1）	人称代詞	±	学校、家、……（組織・集団）	B
	2）	人称代詞	±	校长、老师、…（地位・役割）	C
	3）	人称代詞	±	妈妈、爱人、…（親族）	C′
Ⅱ］	4）	名　詞	±	后面、前边、…（position）	D
	5）	名　詞	－	上、里、外、…（localizer）	D′
	6）	名　詞	±	鼻儿、把儿、…（附属部位）	E

全体を，Ⅰ・Ⅱに分けて考えられよう。Ⅰにおいて，Ｂはもっとも意味上独立性が高く，先行人称代詞との関係から不可分所有の概念が生ずる。Ｃ・Ｃ′は共にＢの内部における地位・役割名で，特にＣ′は‘家’にかかわる。Ｃ・Ｃ′は一定の組織、構造内で規定されるゆえ，語自身関係的な面をもつ。

ⅡはⅠの Ｂ・Ｃ・Ｃ′に比し，項目自体より関係的であり，すべて意味上独立性が低い。意味解釈において何らかの先行実質名詞を要求する。先行語の制限はⅠよりゆるい。Ⅰの先行語は閉じた類であるが，Ⅱは開かれている。Ｄ′の

de の生起が［－］であるのは，D′の文法機能が bound であることによる。Eにおいても先行語が bound であれば［－］の値をとる。Eは人称代詞を先行語にとれない。

*　　*　　*

“de” の省略可能性の問題は，もとより単純な規則化を許さない錯綜した側面をもっている。本稿は，従来解明されたものを中心として，そこに一貫した説明原理が可能ではないかという仮説を述べたに止まる。特に，文成分として主語や目的語の位置に立った時の変化については取り上げなかった。なお，インフォーマントとしては，韓洋氏（1953年生，北京市出身，ＮＨＫ中国語講座ゲスト）を煩わせた。

（本学大学院博士課程）

〈参考文献〉

松本　昭　1968：‘中国語形態素の形及び意味に関する考察’東京教育大学文学部紀要『国文学漢文学論叢』第十三輯

望月八十吉　1974：『中国語と日本語』光生館

中川正之　1973：‘構造助詞の“de”について’『中国語学』217

A・A・龙果夫　1958：『現代漢語語法研究』科学出版社

陳瓊瓚　1955：‘修飾語和名詞之間“的”字研究’『中国語文』1963.10

肅父　1956：‘名詞性詞組中“的”字的作用’『中国語文』1956.3

Chao, Yuen Ren 1968 : *A Grammar of Spoken Chinese*, University of California Press, Berkely and Los Angeles.

Fillmore, Charles J. 1968 : ‘The case for case’ *Universals in Linguistic Theory* Emmon Bach and Robert T. (eds) New York : Holt Rinehart and Winston pp. 1-88

Lyons, John 1968 : *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge at the University Press.

—— 1967 : ‘A note on possesive existential and lacative sentences’ *Foundation of Language*, vol. 3, No. 4, November, 1967